企業

社員への刺激になる

長期型と呼ばれるインターンシップに参加する学生は、まだ少数派だ。文部科学省の調査では、１カ月以上のインターンへの学生の参加率は0.3％にとどまる。ただ、そうした状況下で、率先して長期型インターンを企画する企業も出始めた。

梱包（こんぽう）材などを開発・販売する老舗「梅花堂紙業」（名古屋市）は、２年ほど前に有給の長期型インターンの受け入れを開始。名城大大学院１年の水谷駿佑さん(23)は、週に１、２日のペースで１年半にわたって参加している。佐野博政代表取締役(53)は「長期型に取り組もうという時点で、やる気や意識が高い。そうしたインターン生が、社内のカンフル剤になってくれる」と評価する。

インターン生ながら、梱包材の設計から、段ボール製家具などの新商品開発にまで、幅広く携わる。佐野さんは、水谷さんの加入が、若手社員を中心に好影響を与えていると指摘。「水谷さんに事業内容などを説明する時には、社員もこれまでに学んできた知識を整理して言語化する。それが社員の成長につながっている」と手応えを感じるという。水谷さんも「決まった仕事をこなすアルバイトと違い、長期インターンでは、課題に対して何らかの成果を出さないといけない。今後、働くための準備になっている」と話した。

長期インターン生の水谷駿佑さん㊧と、梅花堂紙業の佐野博政さん＝名古屋市西区で